

<被控訴人 [REDACTED] 法定代理人親権者母 [REDACTED] >

私は 1960 年 2 月 29 日生まれのフィリピン人、[REDACTED] です。

私は 12 人の兄弟姉妹の 8 番目として育ち、私たち家族の生活はとても貧しいものでした。そして、私は家族を助けるためにエンターテイナーとして日本に働きに来ました。はじめは、日本語もよくわからず、とても怖い思いをしました。しかし、苦しみに耐え、日本語を学びました。そして、何度来日を繰り返したことでしょう。いつの間にかエンターテイナーとして日本に再び戻ってくることが難しい年齢になっていました。私はフィリピンに帰っても将来がないこと、そして貧しい両親や兄弟姉妹をまだまだ助けなければならなかったために、職場から逃げ出し日本に残ることを心に決めたのです。

私は在留資格がないためにさまざまな困難を経験してきましたが、フィリピンに帰ることを考えて、どんなことにも耐えようと必死に耐えてきました。そしてそんなとき、私は子どもの父親と出逢ったのです。私は彼の言葉を信じ、彼と 2 年間のお付き合いをして、[REDACTED] を身ごもりました。そして、[REDACTED] は今、6 歳となり、[REDACTED] 小学校に通っています。

一人の女性として、自分の子どもを持つことは夢でした。私はすでに 39 歳となり、子どもを産むためにはこれが最後の機会だと感じていました。彼はさまざまな言い訳をして、子どもを堕ろしたがりましたが、私はそれに応じませんでした。そして、彼なしにお腹の子どもを育み続けたのです。

現在、

私は一人の母親として子どもによい将来を与えたいと願っています。私が子どものときにはとても貧しくつらい思いをしてきました。私は、自分の子どもにはそうした思いをさせたくありません。

この日本で、息子は生まれ、さまざまな文化を培いながら育ってきました。息子は他の日本人の子どもたちと同じだと思っています。話す言葉は日本語で、父親は日本人です。

私をはじめ、私の息子と同じ問題を抱える子どもたちとその母親たちは、みな子どもたちに日本人としての権利を認めていただきたく、この法廷に来ています。あなた方もきっと子どもを持つ親なのだと思います。よりよい子どもたちの将来を願う私たち親の願いはひとつです。こうした子どもたちはみな私たちの将来でもあるのです。